軒轅教、大同教、天主教、基督教、…政府に禁止された邪教としては、白蓮教、摩門教、一貫道、真空教、存在教、救世教、夏教、天宮教、望教、生長之家、創価学会、鴨蛋教、大被教、など百余種の多きに及び台湾人の信仰に対する熱烈さを推知し得る。近年、新港飴で有名な雲林県新港郡で裸女教が出現し、風俗に害ありとして取締をうけた。

台湾に於ける宗教は奸余曲折の歴史を、色濃く反映していることに注目すべきである。

政権と密着していたオランダ伝来の基督教会は潰滅し政権と無縁のイスパニア伝来の天主教、英国の長老教会は今以て健在である。日本時期、土匪の一味として処刑された無名の戦士も、光復後に於ては抗日義勇軍の志士として崇敬の対象となる。光復後の、台湾の仏教について若干の特色を略記すれば、戒律を重視しない日本仏教の影響から脱却するため伝戒を重視したこと、寺廟に本末の関係がなく僧尼に階級の上下がなく平等であることを自負していること、日本と同様に年少者の出家が減少していること、反対に住持の八割を尼僧が占めていることは今後の問題であろう。高雄仏光山にある東方仏教学院は出家者の教養の向上に開設されたものであるが、再三再四の猛運動にも拘らず、未だ政府公認の大学となっていない。

台湾仏教の前途はまさに多事多難である。

（一九七九・十一・稿）

ヨーロッパ修道院訪問と霊性の交流

町田是正

洋の東西を問わず真の文化の源泉は「霊性」(die Göttlichkeit, Geist)である。鈴木大拙博士の創唱をまつ（「日本的霊性」（岩波文庫所収）参照されたい）までもなく、人間生活のすべての営みの源泉であることは誰人も否定できない事実である。人間の知情意の根本機能としての霊性こそ、人類文化の源泉であるべきである。我々は改めて現段階に於て、霊性の重要性を問い直す秋に至っている。

これまで東西文化の交流は盛んであった。我国とヨーロッパ諸国との間にも、人文・社会・自然科学の諸分野・芸術や経済の交流は稔り多いものがあった。然るに霊

性の交流だけがとり残されてきた事は、明らかに東西文化交流に於ける問題点であった。斯る現状の中で昭和五十四年初秋、日本宗教界の総力を結集して、西欧キリスト教との間に「東西文化の源泉＝霊性交流」をテーマとして、企画実施されたことは意義あることであった。（上智大学・南山大学・花園大学の企画推進・臨済・曹洞・浄土・天台・真宗・真言・日蓮・神道の代表参加）

※ 昭和五四年八月三十日より十月二日まで、西欧修道院の訪問と対話を目的として西ドイツ四ケ所・フランス四ケ所・ベルギー二ケ所・オランダ二ケ所・イタリア一ケ所に於て日本宗教界代表者四八名が小グループに分かれ修道院生活を体験した。

此度の東西交流で注意が払われた事は、日本の霊性が単に「禅」に限るものでないことであった。今日ヨーロッパ世界に於て「禅」が次第に市民権を得つつあることは事実であって、禅道に入信する者、伝統的キリスト教の信仰を豊かにする目的で禅に精進する者が増加している。然し反面、必ずしも禅が正しく理解されているとは云えない。日本仏教にとって困ることは、誤った禅の知識を通して禅イコール日本仏教、仏教イコール禅といった偏った固定観念の生れる事の危惧である。此処に日本仏教とキリスト教との相互理解こそ緊急の課題の一つともなり、単に教会や修道院の見学観光の研修ではなくて実際に仏教徒が修道院内で生活することを通して、積極的に仏教を理解させる方途が企画されたのである。私は偶々企画実行委員会から招聘され、日蓮宗から唯一人参加させていただく事となり、責任の重大さを痛感した。（外務省の後援もあって、日本文化使節の代表ともなった）

私が滞在した修道院は、西ドイツのバイエルン地方のベネディクト修道会に属する「SANKT. OTTILIEN KLOSTER」であった。曹洞禅四名、神道一名、日蓮宗の私の計六名が、百二十名の修道士達と生活を共にした。（森と湖と広々とした田園風景の美しい地方）

この修道院は「祈り働け、そして学ぶ」（Gebet arbeiten Lernen）を生活の信条としている。

修道士には五つの誓願がある。即ち(1)従順（絶対服従）・(2)清貧（私財の放棄）・(3)定住（修道院生活の厳守）・(4)貞潔（生涯の独身）・(5)生活改善（信仰生活の実践）の五つである。これらの修道誓願（Ordensgelübde）を日常生活の中で実践するためには、肉体的にも精神的にも緊張と厳しさ、苦しさと忍耐とが要求されるが、修道士のすべては修道誓願の実践に生き甲斐を見い出している。イエズスの隣人愛を実践し、修道誓願の実践によって培ちかわれる修道士達の「浄らかな愛」は、仏教の慈悲と相い通ずるものがあることを確め得た。

修道院長のすばらしい統率力、（NOTKEL WOLF PRIMAS・三十九才の若い指導者）その卓抜した能力には我々一行は示唆される所が多かった。院長が（哲学・神学の学位を有し五ケ国語を駆使する。年功序列ではなく能力ある者が選挙されてプリーマスに選出された）

我々の質問に答えるとき、自己の全能力を傾け、精魂をこめる姿勢は、情熱的であると共に敬虔的でさえあった。これ程までに愛の人となれるものかと、教示されること再三であった。院長に統率される修道士達のすべてが、課せられた仕事に全身全霊をぶっつけて精進する姿は尊く美しかった。

私は修道院側からの求めに応じて、日蓮聖人の生涯と思想について約六時間の講義する時間を与えられた。日蓮聖人について語ることは、西欧世界で最初ではなかったか。日蓮とは—日本仏教を代表する仏教者、慈悲の涙の人、梅陀羅の人、為政者と斗った人、懺悔菩薩道を歩いた人、孝養の人—法華経の精神を実践した宗教者であること強調した。禅だけではなく、日本仏教の性格にも少しの理解を得たことは幸せであった。

修道士二名の「修道誓願」の叙戒式に立ち合い、その誓願式に於て私の脳裏を去来したものは、七百年前の宗祖の法華宣揚の誓願された姿であった。宗祖の誓願された英姿が二名の修道誓願の姿とが重なり合い、大いなる感動をおぼえたのであった。

私達六名は悉ど作務労働はさせられなかった。（わずかに農園の仕事を三日間、計九時間程度）私達は専ら知的訓練に主眼のおかれたスケジュールを課せられた。世界的な権威者による講義を受講できた事は、内容も豊かで幸せであった。

修道士達が肉体的な愛も、感覚的な愛もすべて脱却して、全くキリストの愛の中に生きている姿はすばらしかった。哲学や理屈の世界を超越した修道士達の姿は、今後の私達の在り方に大いなる示唆であった。九月二十六日バチカンのセント・ピエトロ寺院に於て教皇ヨハネス・パウロ二世と接見した。日蓮宗僧唯一人ながら、他の代表者と同様に、日蓮宗僧として祝福を受けることが出来た。此処でも東西霊性の交流の重要性と、将来とも交流が可能であることが確認された。

約一ヶ月余の修道院生活は決して楽ではなかった。しかしその厳しさが次第に歓びへと昇華されていく自己を自覚しないわけにはいかなかった。東西の「霊性」の交流は愈々重要であることを再確認させられた。修道院訪問の詳細は改めて本誌次号で報告の機会をもちたい。